

る。

レッドバージ後、政令違反容疑等でバクられ、ガサを何回も受け、永い間警察の尾行を受けていた。山に行っても川に釣りに行っても、少し離れて警官が上下に釣りをしていた。

シベリア墓参

ダモイ時、二度とこんな所へはと思っていたのは誰も同じだと思う。しかし、帰りたい帰りたい故郷への思いを果たせず何であんな所で命を落とさんならんね、その無念さを思ったら一度でいいから慰霊の墓参に参加したいと誰に相談するともなく参加を申し込み、平成四年のコムソモリスクに参加した。

男泣きにお経をあげた。涙してまともに読めない。水だ酒だと注ぐ。そこに咲いている百合の花、キスゲの花を手折り供えた。無事墓参を終えたが、霊が呼ぶのか、平成五年も戦友と共にコムソモリスクを訪ねる。動けるうちに平成七年、もうこれが最後かと平成十年と墓参。その年プリモレ（沿海州）の墓地調査を依頼された。遺骨収集がスムーズに行われるため

の事前の確認調査である。厳しい仕事であるが、半月間の調査を富士市の望月氏と二人で任務を果たして来た。

シベリアのことは動ける間は付きまとうだろうし、死ぬまで忘れることは出来ない。二度とおろかな戦争をしてはならない。戦争の犠牲者は私等で終わりにと訴えて、筆をおく。

シベリア抑留体験記

大阪府 有光 徹二郎

大東亜戦争勃発の昭和十六年七月十九日「関東軍特別大演習」との名目で召集令状が来た。私は出征兵士としての赤袴もかけてもらえず、歓呼の声にも送ってもらえず、ただ一人さびしく、こそこそと朝倉の高知連隊へ入隊したのである。それは、全国的大召集であったので、敵国のスパイの目を恐れて、目立たないよう入隊せよとの軍の敵命のためであった。

私は第一補充兵（第一乙種合格の昭和七年兵）であり、入隊した時は、輜重兵特務兵（二等兵）であった。その当時は「輜重輸卒が兵隊なれば、蜻蛉、蝶々も鳥のうち」と言われた時代である。馬の扱いどころか、馬に触ったこともなく、知っているのは学校で受けた軍事教練ぐらいである。入隊十日目で、一頭の馬をあてがわれて（なんの訓練も受けず）部隊と共に東満の虎林第一五〇部隊へと連れて行かれた。馬が案外おとなしくついて来てくれたので助かった。

軍隊生活については数々の思い出もあるが、また次の機会に譲るとして、私は昭和二十年七月歩兵に転科、ハルビン第七八二連隊へ転属、終戦の前日十四日付で軍曹（ボンダム軍曹？）となり、遂に昭和二十年八月十五日が来た。

敗戦だ！ ソ連兵が来るまでハルビンの治安維持の任に当たり、九月武装解隊となり牡丹江に集結したのである。

昭和二十年十二月十六日「ダモイ、トウキョウ！
ダモイ、トウキョウ！ ハラシヨ（東京へ帰る、うれ

しいねー）」とソ連兵たちに騙されて、一〇〇〇人を単位とする一個大隊（私の大隊は第一〇四作業大隊で、隊長は大村大尉）が編成されて入ソ、イズベストコーワヤ地区テルマ第二二〇分所（バイカル湖の東）で、バム鉄道建設に従事させられた。

牡丹江を出発した時は一〇〇〇人単位の部隊であったが、目的地に到着した時は六四三人になっていた。途中で栄養失調で死亡した者、落伍して途中のラーゲル（収容所）に置いてきぼりにされた者、合計三五七人ということになるが、私の知っている限りでは、栄養失調で死亡し、途中で真っ裸にされて氷の中に葬られた者は一五〇人を下らなかったと記憶している。

シベリアでの抑留生活といえは、だれでもが死と隣り合わせの生活であった。ちょっとしたこと、が生死の分かれ道になり、飢えとヒョロヒョロの体に酷寒の中での重労働、飢餓、それに加えて精神的重圧が襲うのだからまったものではない。

私のいたラーゲル第二二〇分所の思い出といえば、マンドリン（ソ連製の自動小銃のことで、マンドリン

を持つてゐるような格好で私達に銃を突きつけながら監視、威嚇していた)、酷寒、即ち体感温度は氷点下七〇度という日もあった。飢え、人民裁判、凍傷死、いやな思い出ばかりだ。話し出したら限りがないが、二、三の思い出から、その悲惨な状況を知ってもらいたいと思つて書いてみる氣になつた。

まず、びろろな話になるが、私達の收容されていたラーゲル第二二〇分所のトイレは、幅二メートル、長さ一〇メートルの壕の上に板を並べてあるだけ、外側は木の囲いはあるが、各個には仕切りの垣はない、全部がまる見えだ。朝などの混雑時、頭を並べて、前後左右しゃがんでゐる光景を想像してみてください、壯観の極みである。氷点下四〇度、五〇度以下が普通の厳寒期に、あの黄金が、落ちるそばから凍りついて、盛り上がつて鍾乳洞のような山が出来る。それが板の間から顔を出すようになる。私達は黄金の塔と呼んでゐた。真夜中など、電灯などあつたものではないから、しゃがんだ途端、尻を突き上げられる。その痛いこと痛いこと、何といつてよいか、筆舌に尽くし難い

ものがあつた。

しばしば黄金の塔を壊す作業が回つて来る。鉄のボールでコツコツと壊して、籠に入れて捨てに行く。どんなに払つても氷のかからは服に付着してゐて、部屋に戻るとそれが解ける。ものすごく臭い。へどが出そうだ。それでも皆平気で飯を食つてゐる。あそこでは俺達はみんな人間かな……?と思ひ出す。

シベリアでは、我々は体力の消耗と足りない食事で大なり小なり栄養失調になつてゐた。俺達はみんな腹いっぱい食いたい、帰りたいの二つだけが希望であつた。三度の食事といへば高粱(粳つきのまま)または大豆のシャブシャブのカーシャ(粥)が飯盒の蓋に八分目、まるで水を飲むようだ。たまに黒ペン三〇〇グラム(厚さ一・五センチ、横八センチ、縦六センチ程度)の大きさ)、それでは腹が減つて仕方がない。

ラーゲルの周囲は原始林で、到着してすぐバム鉄道の建設に駆り出されたが、皆は野草を採つて来ては岩塩を入れて飯盒でゆでて食べる。つい食べ過ぎるとときめんに下痢が起こる。体が弱る。とにかくひどい

ものだからまた食べる。その悪循環が始まり犠牲者が出る。結局野草の食べ過ぎが原因である。栄養失調というものは人間を餓鬼にしてしまう。頭では食べ過ぎでは駄目だと分かっているながら食べるのがやめられない。やせ細って死んでしまう。そればかりではない、毒草、毒茸が命取りになった者も沢山いる。ほんとうに飢餓地獄とはこのことを言うのだろう。

次に思い出されるのが人民裁判である。あまりにも「エゴ」「醜さ」の話になりそうで、あまり話したくないことだが……。

食糧とダモイ（婦国）を求めて日本人同士のだまし合い、陥れ合いで、人間の醜悪な面をまざまざとさらけ出した人民裁判！

入ソ約七カ月後と思うが「友の会」なるものが出来た。これは共産主義社会の優位性をPRする新聞（日本の新聞の四分の一程度の大きさで、両面に記事が騰写されている）を発行、各ラーゲルに配布し俺達を洗脳する手段として用いられた。ラーゲルではこの新聞を教材とした研究会が開かれるようになり、共産党

小史、一步後退二步前進とかいろいろと講義が進んでいくうちその研究会がだんだんエスカレートして来て、これを実践するため「反ファシスト委員会」なるものが誕生した。

先ず最初に始めたのが「人民裁判」である。いわゆる吊るし上げである。「反ファシスト委員会」のメンバーは互いに同志○○と呼び合い、作業は免除または作業監督として洗脳計画に従事している。

先ずスタートとして作業能率の悪い者を選び出し台の上に上げ、大衆の前でその欠点をあげ出し吊るし上げるのである。その光景たるや、同じ日本人同士がその欠点を口々に悪口雑言、紙上では書けないような雑言毒舌を陳述するのである。凄惨の極みである。吊るし上げられた人は台上に上下座しながら自己批判をする。本当に見てはおれない。（共産党のPRは、先ず人民裁判から始めるのが通則のようであった。）

これがエスカレートして、委員会に反抗する者はダモイが遅れる、協力せぬと減食の憂き目に遭うなどと風潮が流れ始めた。事実これがために重労働ラーゲ

ルに転出させられた者も出た。ダモイや食料を求めて同僚の欠点悪口等を告げ口し、吊るし上げの材料を提出して委員会に好感を得ようとする者も始めた。そしてお互いに「疑心暗鬼」の毎日がたまらなく悲しい日々であった。

しまいには馴れてしまつて、平氣と言えば語弊があるが、とにかく無氣力になつて、それが日常茶飯事のようなことになり実にな情けない限りであつた。飢え、体力の消耗、精神的圧迫が加わると人間は如何に弱いかを知り、大和魂、武士は食わねど高楊枝などといばつていたが死の恐怖には負けてしまふ。しかし私達はこのようなことにならないよう日頃の訓練、教養、強固な精神を養つてゆかねばならないと思うが、なかなか難しい。

凍傷死のことについて話してみよう。シベリアでは霜やけにかかったなと感じた時はもう凍傷三期まで進んでいる。

ある日のことである。防寒外套も役に立たないほど気温が下がったとき作業に出された。シベリアでは水

点下四〇度以下に気温が下がったときは作業は中止と
いうことになつていたが、作業が終わりラーゲルに
帰つてくると、なぜかソ連監視兵が「ブイストラ！
ブイストラ！（早く早く）」とラーゲルの中に入るの
をせきたてる。私達も寒かつたのですぐペーチカで体
を温めた。

夜になつて戦友の一人が右手小指が痛くなつてきた
と言うので、見てみると小指が紫色にはれあがつてい
る。凍傷の第三期である。普通であればかゆくなり膿
んで来るといふ順序であるが、シベリアではそうでは
ない。夜明けを待つてすぐ医務室に行かせた。日本の
軍医は「駄目だ！ ほつておくと瘻疽になる」と言
う。その小指の肉は崩れ骨が飛び出している。それを
ヤットコで根元からぶち切つてしまつた。だがその結
果は芳しくなく、片腕切断をするためか他の病院に送
られた。その彼はいま生きているやら、その消息は知
るよしもない。

その後氷点下四〇度以下で作業したことが判明した
のでソ連側に抗議を申し込んだが、捕虜の悲しさ、そ

のまま泣き寝入りになってしまった。

今日も暮れゆく 異国の丘に

友よ辛かる 切なかる

シベリア抑留の悲哀と戦後の暗い世相を伝えて今も歌い継がれている「異国の丘」は、どれほど人々の心にしみ入ったことであろうか。それはシベリア抑留者が現地での自分達の心情を自ら綴った詩ならではの「心のうた」である。疲労、酷寒、飢えに倒れた同胞の屍に合掌しつつ、筆をおく。

帰国への道

鳥取県 細木 明 男

ダモイの港ナホトカ

中央アジア、カザフ共和国のクズオルダ収容所に送り込まれていた私達は、悪夢のような捕虜生活を終えて、祖国日本への帰還の喜びをかみしめながら、ナホトカ港にやっとの思いでたどり着いた。昭和二十二年

七月四日の夕刻も間近い頃であった。

抑留者帰還の最終集結地であるナホトカは、乗船するまでの間しばらく滞在させるため、バラック建ての収容所が多数棟建っており、シベリア奥地から引き揚げてきた同胞の抑留者ではほとんどの建物が満員の状態であった。

私達は、あたりが薄暗くなってきたのに建物の中に入れてもらえず、広場のような所に集められた。その広場の正面には、仮設の舞台のようなものが設けられていた。

やがて、一人の男が壇上に上り演説を始めた。照明の明かりもないので、どのような人物か分からなかったが、声の調子からして二十代の若い男のようであり、また語調から察すると、かなりの学歴のある人物のようでもあった。

演説の内容は、言わずと知れたスターリンとソ同盟に対する讚美、日本軍閥と財閥のこきおろし、果ては天皇制の打倒に及び、続いて祖国日本を共産主義により民主化しようというものであった。私達への今まで